

プロジェクト実施者インタビュー 第5回

JST 社会技術研究開発事業 平成19年度採択プロジェクト「子どもの見守りによる安全な地域社会の構築 ハート・ルネサンス」

代表者・池崎守氏を中心とする多様な人々とその活動

大阪府堺市東区の登美丘地区では、『特定非営利活動法人 さかい hill-front forum』による活動が大きな成果をあげています。様々な活動の中で、注目の的となっているのは子どもに携帯端末を持たせ、見守りサイトを構築して安全を確保しようという新しい試みです。橋下大阪府知事が子どもに携帯電話を持たせないという方針を打ち出し、話題になっている時に、その地元・大阪府で携帯電話を活用してチャレンジしようということですから、注目されて当然と言えるでしょう。どんな人たちがどんな動機をもって活動しているのか、現地を訪れ行動を共にさせていただきました。その結果、携帯電話を利用した見守りは活動の柱には違いないが、色々な活動の1つであること、地域活動を継続し今日に至る長い道程があったこと、高い理想を掲げながらも、活動をできる人たちが可能な範囲内で活動を続けるという緩やかな組織であるということ——などが分かりました。池崎守さんをはじめ、活動を担っている皆さんから話を伺いました。

清掃から始まった地域活動

大阪市の中心地・難波から南海電鉄で南へ20分、活動拠点の堺市立東文化会館は北野田駅とデッキで結ばれた好位置にありました。池崎さんが代表者を務めるNPO法人は、指定管理者として東文化会館の運営に携わっています。まず、『さかい hill-front forum』が何を目指してどんな活動を行ってきたかを伺いました。これについて池崎さんは「新たな地域社会の在り方を提案し構築していくことです」と、明瞭に語ってくれました。



池崎 守代表

「自分たちが暮らしている地域が安全で、より良い地域社会であることを願うのは当然のこと」というのが、活動の“原点”であり最終的な目的だといいます。その目的を達成するために様々な活動が行われてきましたが、一連の活動の大きな柱であり、注目されているのが平成19年度に『犯

『罪からの子どもの安全』の研究開発プロジェクトとして採択された『子どもの見守りによる安全な地域社会の構築 ハート・ルネサンス』です。

この研究開発は、住民・学校・行政・企業が一体となって、携帯電話やインターネットなど先端のIT技術を活用し、同時に地域FM局を開設して子どもの見守りシステムを構築・検証し、そのシステムを提案することを目的としています。そのことを通じて現在の日本で大きな課題となっている教育再生・地域再生を成し遂げることを最終的なゴールとし、そのために“子どもの安全”をテーマに広く人々をつなぎ、地域防犯活動に有効で最適な児童見守りシステムモデルを提案する、というものです。特に、携帯電話については全国的に否定的な意見が多い中で、マイナス面の検証も行い、それを乗り越えた活用を提案する、としています。このプロジェクトに採択される以前から、さかい hill-front forum では、多様な活動を展開しています。最初の活動は2002年に行われた防犯灯の整備でした。登美丘地区にある伊勢道は地域の主要な道路にもかかわらず、「ひったくり街道」と呼ばれるほどひったくり事件が多く、年間10件前後発生していました。また、登美丘北公園では、少年たちが深夜にたむろして、花火をして騒いだり、ゴミを散らかしたりしていたため、住民から苦情が出ていました。こうした事態に対して住民が自ら立ち上がり、2002年“ひったくり街道”に自費でセンサーライトを設置したり、登美丘北公園問題では対策会議を開催し、その日のうちに現地の夜間パトロールを実施し、これが現在も続くパトロールの最初のきっかけとなりました。こうしたことから、登美丘地区での防犯活動が活発になり、今日に至っているのです。しかし、最初に池崎さんが活動を開始し始めたのは、これよりはるか以前のことでした。

「私は40代までは怪物と呼ばれたほどで、睡眠時間は2~3時間ほどだったでしょうか、夜の10時頃から1時まで見回りを行い、明け方近くによく寝床に入るという生活でしたが、今では無理がききません」と言うが、訪問したこの日のスケジュールも大変なものでした。池崎氏は市内で米屋を経営しており、当然経営を維持していくための業務は不可欠です。一体、地域活動へと駆り立てるものは何なののでしょうか？

「私は卒業後、家業を継ぐことになりましたが、その時ある人から地域活動をやれというアドバイスをいただき、それが大きな契機になっています。そもそも、自分が暮らしている地域が安全で、安心して暮らしたいと思うのは当然のことではないですか。それで28歳の時からスタートし、人生の半分を地域活動に費やしてきたわけです」

最初の活動は若者がたむろしている場所の掃除からだったということです。たむろすれば必ず吸殻が捨てられゴミが散らかる。それを掃除し続けたのです。町の人からは「下らんことをするな、警察よべ！」と怒鳴られ、若者からは変わったオヤジだとわらわれ、それでも続けたといえます。

「そのうち、“おっちゃん、ボクらも手伝おか？”と声をかけてくるようになる。そこでやらしては駄目なんです。“かまへんで、掃除は年寄りがするさかい、若い子らは遊んどったらええ”と続けていると、やがて私と一緒にゴミを始末するようになり、話もするようになる。“やっぱり、まじめにやるのがエエンとちゃうか？”と話すと、まじめって何やと聞いてきます。“それは自分で考えてみ”と。やがて自分らで掃除するようになり、たむろしなくなりました。(解決まで)2年かかりましたね。そのうちそうした子どもたちも地域活動に参加するようになり、区民祭りの司会をやってもらったりしました。今の地域活動には、昔そういう子だったのが、いっぱい参加しています。ただ、掃除するにも女の子は難しいですね。大抵はしゃがんで足の間に吸殻を捨てていますから、そこへ箒を入れるわけにはいきません。必ず女性に同行してもらいました」

一緒に掃除に回った女性が、現在も共に活動している渡士(わたし)さんとのことです。渡士さんはNPOの副理事長として活動の中心にいます。

最大400人が夜間パトロール

もう1つ、合同パトロールを紹介したいと思います。このパトロールは1か月に1回、第2水曜日夜の7時過ぎに登美丘地区の人たちが文化会館に集まり、情報交換した後、同地区を1時間ほどかけて歩くというものです。参加されている人は様々です。中高年の方たちばかりではありません。男女を問わず若い世代や明らかに会社帰りに参加したという人、飲食店を営んでいる人、退職後に地域活動を始めたという人など、性別・職業も年代も様々です。パトロールは行進でもデモ行為でもなく、リーダー格の人がマイクで「防犯パトロールをしています、戸締り、火の用心をお願いします」と呼びかけながら、ぞろぞろと歩いていく——ただそれだけの行為が、住民の圧倒的な支持を受け、この地区の防犯を飛躍的に高めたというのです。防犯の腕章をつけている人もおれば、ユニホームらしいものを何人かは着用していますが、多くの参加者は気軽ないでたちです。このパトロールの特徴は、途中から合流しようが帰ろうが、まったく自由になっているという点です。コースもその日の都合次第。参加者の誰かが、最近不審者がいたという話があったので、そこをパトロールしてほしいと希望すれば、では、その地区もコースにいれましょう、というように集合した時に決めているとのことでした。

これまでの参加者数は、最大 400 人、平均 200 人、最小で 130 人とのことでした。パトロール参加者以外にも、約 100 人がそれぞれの地域で張り付き、防犯を呼び掛けるそうです。この日は年明けで様々な行事が重なったことに加え、猛烈な寒波が西日本を襲い、寒々とした氷雨が降ったり止んだりという条件でした。それでも夜 7 時を過ぎると東文化会館のエントランスホールを人が埋め尽くし、130 人を優に超える参加人数でした。400 人を超える時は、大変な熱気だろうということは想像に難くありません。



夜間パトロールの様子

「現場主義」がすべての原点

「私は現場主義で、まずやってみようということがすべての活動の原点です。全国で大阪府がひったくりや痴漢、車上狙いといった街頭犯罪の最多発地域であり、堺市ではこの地域が最も件数が多い地域でした。黒山警察署管内の登美丘地区では 2001 年にひったくり件数が 82 件も発生しており、特に伊勢道という 1 km の区間は“ひったくり街道”と呼ばれるほどひったくりが多発していました。それに対して住民が自費でセンサーライトを設置したのが活動の始まりでした。また、登美丘北公園では少年たちが深夜にたむろして花火をして騒いだりゴミを散らかしたりして住民から苦情がでていました。そこで対策会議を開催し、その日のうちに問題が指摘された現地の夜間パトロールを実施し、これには 120 名が参加してくれ、警察も 10 名参加してくれました。これがパトロールの始まりです。これ以降、登美丘地区全体でもひったくりは 10 件程度まで減少しています。合同パトロールもとりあえずやってみようという試行錯誤からスタートしたもので、重層的な活動の一環であり、1 つ 1 つの活動の効果を数字として分析するのは難しいですね。」

行政も巻き込む一大運動に

一大運動にまで発展してきたが、初期には様々な障害があったということです。既に防犯委員会、福祉委員会、老人会等など既存の組織があり、まったく新しい活動を展開することに対して軋轢が生じ、また、運動が広がるにつれて内部の確執もあったといいます。

「ある委員会に出席するようになった時、“新参者”は発言しないのが慣例だと言われたことがあります。それなら、私の代わりに人形を置いていくから、それを相手に会議を

してくれ、といったところ、ずいぶん怒っていました。やはり自分の権威を傷つけられるということを非常に嫌がっており、最初の頃は活動に対するクレームはたくさんありました。それと、“やんちゃくれ”が公園で騒いで困るといった場合、住民は禁止するといいますか、排除する方へ行きがちです。そうした子どもたちのほとんどは素直な子ばかりで、話し合っただけで例えば夜は9時までにしようとルールを決めれば、ちゃんと守ってくれます。大事なことは防犯に偏ってはならないことです。そうすると、どうしても権威主義に陥りやすくなって、制服をそろえようといった話になってしまいます」

現場に密着した活動を継続し、既存の組織は元より、当初から協力的だった警察との連携がさらに進み、市や区役所も巻き込んだ活動へと拡大していきました。そのことは夜間パトロールに先立って行われた定例の合同会議で余すところなく発揮されていました。

合同会議のメンバーは堺市副市長、所管の警察署長、教育次長が入っており、この日は東区の自治推進課係長、府立登美丘高校の校長、地域FM局開局の企業担当者、携帯端末GPSを開発したNEC担当者、大阪市立大学特任助教、はつしば学園事務長、東区長、地元住民らが出席し、さらには隣接する河内長野市から2人が活動を学びたいということで出席していました。



合同会議の様子

携帯端末利用の見守りに圧倒的支持

携帯端末による子どもの見守りは、大阪府知事の子どもには持たせないとの発言により、注目度に拍車がかかる事態になりました。現在の進行状況は私立の小学校2校と、市立の小学校4校の、計5校で実証実験をつづけています。このうち、私立はつしば学園は児童全員に持たせており、公立の4校は5人に持たせて昨年からは順次実施に移しているとのことです。合同会議でも携帯による見守りが話題の中心になりました。池崎さんは次のように語っています。

「私は本来、携帯端末を使って見守るといふようなことが好きな人間ではありません。私も悩んでいますが、アンケートや感想を尋ねると反対意見はなく、使ってみて良かったといういい話ばかりです。今や、携帯もインターネットも生活の中へ普通に入り込んでおり、有効に使われています。どんなものでも無制限に使えば悪い面がでてきます。携帯は

既に社会に浸透してしまっており、小学校の時から、携帯の使い方をちゃんと教育すれば良い結果が得られるのではないかと思います。正しい使い方を教育することこそが大切だと思っています」

携帯による見守りシステムは、身につけて移動している限り、家庭や学校で児童がたどった軌跡をデータとして記録し、位置をピンポイントで把握できるうえ、電源を切っても位置を知らせ続け、児童が危険を感じて操作すると、周囲の風景を画像データで送り続けるという機能を有しているとのこと。さらに池崎さんはこう続けます。

「私は携帯の使い方を議論したいのではないのです。携帯による見守りを行うことにより、地域社会の在り方を提案したいのです。勿論、ここまで高度になった先端技術を便利なものとして使い、もう一度昔のように、小学校の門を開けられる地域社会をつくりたいのです」

世代を越えて繋いでいく

最後に、朝の挨拶運動を紹介したいと思います。この日は地元高校の野球部の子どもたちが参加し、出勤する人たちに声をかけていました。前日の合同会議やパトロールに参加していた登美丘高校の校長先生らも参加していました。運動を始めた頃は、声をかけられた方は何事かと驚き、中には「こんなことをして何の意味がある」と抗議する人もいたそうです。今は声をかけられて朝から気持ち良かったという歓迎の反響があり、一方、挨拶する側もさわやかな気持ちになると言っています。校長先生は次のように語ってくれました。

「やってみて初めて分かります。人と人、世代を越えて繋いでいこうという気持ちを高校生たちも実感しています。次の世代が地域を支えていくわけですが、さかい hill-front forum 皆さんは、我々の高校生を大事にしてくれます」

先端技術を駆使した見守りと、徹底した現場主義は、着実に新しい地域づくりの道を歩んでいることを実感した2日間でした。（文 ジャーナリスト・有村源介）